



Title	神々の領分：バリ島における宗教制度の成立過程をめぐる歴史人類学的研究
Author(s)	永渕, 康之
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46010
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	ながふちやすゆき 永渕康之
博士の専攻分野の名称	博士（人間科学）
学位記番号	第 19068 号
学位授与年月日	平成 16 年 12 月 2 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	神々の領分—バリ島における宗教制度の成立過程をめぐる歴史人類学的研究—
論文審査委員	(主査) 教授 中川 敏 (副査) 教授 春日 直樹 教授 栗本 英世 教授 小泉 潤二

論文内容の要旨

本論の目的は、インドネシア共和国バリ島社会における宗教制度の成立過程を歴史人類学的視点から分析することである。世界最大のイスラム人口を有するインドネシア共和国において、バリ島社会は唯一ヒンドゥーが多数派を占めるという大きな特徴を持っている。宗教制度の成立過程の分析をとおして解き明かしたいのは、これまで正面から取り組まれることのなかったこの事実である。ここでいう制度とは、ヒンドゥーとして可視化される宗教的実践が成立可能となる権力と言説によって構成されるひとつの場である。このような制度を分析するためには、バリ島社会における宗教実践を知るとともに、植民地国家から国民国家にいたる権力と言説がおりなす関係の分析が不可欠である。バリ島社会における臨地調査と植民地時代にさかのぼる歴史的文書の読解を組み合わせる歴史人類学的視点が導入されているのはそのためである。

本論は終章をふくめて 8 章から構成されており、基本的に年代順に記述はすすんでいく。二つの部分に大別され、前半 3 章まではおもに植民地時代における宗教制度の成立過程を取り上げる。第 1 章では王国時代に焦点をあて、東南アジアにおける王権の特徴、王国の基盤となるヒンドゥー的秩序の内実、イスラム、カトリック、ヒンドゥーが点在するなかでの宗教的差異の認識論、ヒンドゥーに価値をおいた植民地学識の成立、宗教、慣習、文化といった概念の成立とその政治的意味、といった論点を先行研究をふまえて議論する。第 2 章は植民地政府による法制度とカーストの導入をとりあげ、19 世紀にかたまつたバリ島をヒンドゥー的社会とみなす認識がいかに具体的に統治体制に導入されたのかを考える。そのうえで 1917 年に起こった大地震以後の植民地政府とバリ社会の交渉過程を分析し、植民地官僚体制において再構成された王家と司祭がいかに宗教的権威を獲得したのかを明らかにする。植民地社会が成熟期を迎える 1930 年代を扱う第 3 章では、世界恐慌に巻き込まれたバリ社会において儀礼が復興したという事実から出発し、肥大化した植民地行政機構において下級公務員として働くバリ人たちが宗教をめぐって活発な言論活動を開拓し、彼らが王家と司祭の権威を批判的ながらも承認することで、現在にいたる宗教制度の基礎が形成される過程を解明する。

植民地時代以後の時期を扱う後半では、まず 4 章においては、党派対立が激化し、暴力と貧困がおおう社会状況において、30 年代に下級公務員だった人々による宗教的な道徳秩序を基礎とする団体活動をとおした秩序の再構築にむけた試みを明らかにする。それとともに、1958 年に実施された地方行政改革が宗教制度におよばした影響を分析する。バリ州が成立したことで、ヒンドゥー、バリ島という領土、州政府という政治主体が一致し、また旧王国が県に

指定されるとともに王家自身の法的権利は消滅し、それにはかわって新たにヒンドゥー代表機関が成立した。第5章においては、代表機関成立のもうひとつの鍵となった運動であるバリ地方議会が中心となって推進した宗教省にたいするヒンドゥー部門開設要求運動の経過と帰結を分析する。第6章ではスハルト政権が打ち出した新秩序において、誕生した代表機関がどのようにヒンドゥーの体制をかため、バリにおける中心的な寺院とされるブサキ寺院において王国的秩序の再現をおもわせる巨大儀礼を実現しうるようになったのかを議論する。第7章では、村落社会における埋葬儀礼とそれを実施する組織の変化を取り上げ、宗教制度と村落社会の関係を考察する。そして終章においては、宗教制度の成立過程の特徴を整理するとともに、ヒンドゥー代表機関が2001年に入って分裂した経過を報告し、宗教制度が新たな局面にはいっていることを示唆する。

バリ島社会における宗教制度は、決して「伝統的」体制が継承されたものではなく、むしろ植民地国家から国民国家へと政治体制が移行するなかで再定義されたものである。本論において最も強調したいのはこの点であり、宗教制度の成立過程を明らかにすることは国家と宗教の関係を問い合わせし、現代社会における宗教のあり方に新たな視点を投げかけるものであると考える。

論文審査の結果の要旨

本研究は、インドネシア、バリ島におけるヒンドゥーという「宗教（アガマ）」の領野が歴史的にどのように形作られていったかを辿る歴史人類学的研究である。筆者によるオランダ、アメリカにおける二年間の文献調査とインドネシア・バリ島における1984年以来の実地調査に基づく緻密かつ野心的な労作である。

筆者は、バリにおける・宗教制度を、具体的にはバリにおけるヒンドゥーの代表機関であるパリサダ・ヒンドゥーを、ヒンドゥーが実体化される言説と権力の編成関係のなかにとらえる。

第1章と2章において、王国時代から植民地時代のバリの権力と言説の歴史をたどったあと、第3章「もうひとつの空間」において、1920年代、30年代の植民地時代後期における特別な言説の「空間」の設立が描写される。豊富な文献資料に基づき、下級公務員たちによって「バリ」が構築され、そして宗教が制度化されるさまが説得力豊かに記述される。独立から開発独裁の時代において、イスラムが多数派を占めるインドネシアという国家の中で、ヒンドゥーをいかに「インドネシア化」していったかが第4章、5章、6章で分析される。とりわけパリサダ・ヒンドゥーという制度の設立をめぐる言説の分析、「バリ州」という国家の制度による儀礼の肥大化の分析は当論文の白眉であろう。7章では著者の調査した村から見た国家と宗教の制度の分析がなされ、激動のスハルト以降に言及して、バリの「宗教」の今後を考察する終章で終わる。

以上、当論文は、議論の妥当性、資料の豊富さ、理論的な独創性において、博士（人間科学）学位論文として十分に価値あるものであると判定した。